

みやぎ生協

● 食のみやぎ復興ネットワーク「わたりのそばプロジェクト」

町内の農地の8割が津波被害を受けた亘理町でのそば栽培を応援する「わたりのそばプロジェクト」。

10月4日（金）亘理町荒浜のそば畑で「花見会」を開催し120人が参加しました。

今年8月、亘理町逢隈・荒浜、山元町山下の計50haにそばの種を蒔きました。3地区の中で最大の20haで栽培する荒浜地区では、震災後初の作物としてそばの栽培を進めました。

しかし、9月の台風の豪雨で荒浜地区の大部分が冠水して、苗は枯れてしまいました。台風

の被害を乗り越えた畑は約20a。参加者は、可憐な白い花を咲かせたそば畑を散策し、亘理産の蕎麦粉の手打ち蕎麦と、はらこ飯を試食しました。

津波、台風を乗り越え、着実に新しい命が生まれてくる畑を前に、関係者からは「この地で農業を続け、地域を守っていく（生産者）」「生産者と消費者の力で宮城の農業を進めたい（JA関係者）」「買い支えることで地域の生産者を応援したい（みやぎ生協理事）」といった声があげられました。



蕎麦ノ花畑ニ居リマス

そばは10月末までに収穫され、製粉後「年越し蕎麦」として、みやぎ生協と県内の農協などで販売される予定です。

（みやぎ生協店舗商品部・食のみやぎ復興ネットワーク事務局 藤田孝）

みやぎ仙南農協

● 「9.1 総合防災訓練」に参加  
JA みやぎ仙南女性部川崎地区が炊き出し訓練

防災の日である9月1日（日）宮城県と川崎町主催のもと、防災意識・技術向上を目的とした「平成25年度9.1 総合防災訓練」が、川崎町総合運動場にて開催され、JA みやぎ仙南女性部川崎地区が炊き出し訓練、同JAが救援物資輸送訓練に参加しました。

地域住民参加型としては、3年ぶりの防災訓練となりました。川崎町にマグニチュード8.0の

直下型内陸地震が発生したことを想定し、地域住民や消防団が主体となって救出活動に取り組みました。

同JA女性部は、町内の防火クラブや中学校の生徒たちとともに、陸上自衛隊炊事車で炊かれた150kgのお米を使用し、約3,000個のおにぎり作りと、地場産JAもろきゅうりの漬物を添えたパック詰め作業に取り組みました。



おにぎり作りをするJA女性部員たち

参加者から「東日本大震災の教訓を活かし、大きな災害が発生しても冷静に対応できるように日頃から地域で連携を図りたい」と意気込みが聞かれました。

（営農経済事業本部 部長 小林潤一）

生協あいコープみやぎ

## ● 「原発事故子ども・被災者支援法宮城フォーラム」参加報告

10月12日（土）エルソーラ仙台大研修室（仙台市青葉区アエル28階）において、原発事故子ども・被災者支援法宮城フォーラム実行委員会主催による、「原発事故子ども・被災者支援法宮城フォーラム」が開催され100人が参加しました。

2012年6月21日「原発事故子ども・被災者支援法」が国会の全会派共同提案・全会一致で成立しました。内容は、放射性物質による放射線が人の健康に及ぼす危険について科学的に十分に解明されていないという認識に立った上で、様々な立場の被害者の自己決定を尊重し、それぞれの「被曝を避ける権利」を認める画期的な法律でした。しかし法の成立から一年以上も放置したあげく、復興庁が突如発表した「基本方針」は既存施

策の寄せ集めに過ぎず、法の理念からは程遠いものです。

このような状況に対して、2013年8月に「原発事故被害者の救済を求める全国運動実行委員会」が立ち上げられ、支援法の理念に基づく具体的施策の実施と原発被害の賠償請求時効問題の解決を求める全国請願署名運動の呼びかけがスタートしました。宮城県は「国の支援法の施策が決まっていない」ことを理由に、子どもと妊産婦の健康調査などの施策を実施しようとしません。また8月に、国を相手取って「支援法の基本方針を定めないのは違法だ」として提訴した裁判の原告には、宮城県丸森町の町民が加わっています。支援法の問題を「福島支援」の問題のみならず、宮城県民自身の問題として捉え、県内の運動を盛り上げていかねばならないと考え、「フォーラム」が開催されました。

篠原弘典実行委員の開会あいさつの後、吉峯真毅弁護士（福島の子どもたちを守る法律家ネットワーク所属）から「子ども・被災者支援法



左から、満田夏花さん、吉澤武志さん、吉峯真毅さん

の理念と復興庁基本方針の問題点」について、吉澤武志さん（丸森町筆甫地区復興連絡協議会事務局長）から「原発被災者はなぜ提訴に及んだのか」について、満田夏花さん（一橋大学非常勤講師）から「原発事故子ども・被災者支援法、骨抜きにする基本方針が決定」について発言がありました。

その後、会場参加者との質疑応答・意見交換が活発に行われました。

支援法について共に学び、国の不作為に対して声を上げていくこと、そして「全国運動実行委員会」と連携し、宮城県内においても請願署名運動を盛り上げていくことが必要だと痛感しました。

（理事 鈴木智子）



フォーラムの様子

### 【原発事故子ども・被災者支援法】

東京電力原子力事故により被災した子どもをはじめとする住民等の生活を守り支えるための被災者の生活支援等に関する施策の推進に関する法律。

みやぎ県南医療生協

● 山元町で「やました花笠秋まつり」開催

10月5日(土)山元町旧山下駅前広場で「やました花笠秋まつり」が500人を超える参加で盛大に開催されました。

開幕太鼓で力強く幕が開き、山元町のみなさんによるフラダンスや手品、花笠音頭の披露、ヘルスコープおおさかのコーラス隊や兵庫の医学生の楽しいパフォーマンスが続きました。また、焼そばやたこ焼き(神戸医療生協)、芋煮(庄内医療生協)などの模擬店も次々に品切れ、

もちつき(いちご班のみなさん)や足湯(ヘルスコープおおさか)、健康チェック、子どもコーナーなど、どこも盛況でした。福島の浜通り医療生協からもFTF車(放射線被曝検知車)が来て64人の方が検査を受けました。

あいにくの空模様でしたが、まつりが終わるまでなんとか持ちこたえ、最後は、全国の医療生協から寄せられた地域名産品(210品)が当たる抽選会で大いに盛り上がりました。



「健康クイズ」 みんなできるかな～？

仮設住宅や復興住宅からも大勢の方が来られ、再開を喜ぶ姿や、子どもコーナーで、医学生と子どもたちが楽しく遊ぶ姿が印象的でした。

このまつりは、近畿ブロックから医学生11人、看学生8人を含む約70人のスタッフと、地域の約70人のスタッフの見事な協力のちからで成功できたものです。前日から荷物番として、徹夜で現場に泊まり込んだ近畿の職員のみなさん、お疲れさまでした。



スタッフ全員でお疲れさま

● 「健康まつり」に1300人が参加

10月20日(日)みやぎ県南医療生協の「第15回健康まつり」が開催されました。朝から雨模様でしたが、組合員や地域の方がたなど1,300人が参加しました。

まつりは、北角田中学校の吹奏楽部の演奏でスタート。神戸のたこ焼き(神戸医療生協)、各支部から野菜や豚汁、弁当やクッキー、飲み物など十数点の

出店や、健康チェック、骨密度測定、展示コーナー、中央舞台など、盛りだくさんの内容でした。展示コーナーでは、今年の被災地支援活動や、「やました花笠秋まつり」の写真などが展示されました。また、山元町の皆さんは手作りの作品を展示販売し、組合員と交流しました。

(常務理事 児玉芳江)



伊具の里童楽娘鼓の  
和太鼓の演奏



展示コーナー

宮城県高齢者生協

● 「震災復興支援ツアー2013」開催報告

9月29日（土）～30日（日）に、被災地の現状、福島原発事故の現地を視察する「東日本大震災・風化させない・忘れない！震災復興支援ツアー2013」を、日本高齢者生協連合会主催・宮城高齢者生協共催により、60人の参加で行いました。

29日は、石巻市日和山から、門脇町、南浜町、湊町と津波被災地を巡り、石巻日々新聞「絆の駅 NEWSsee」において武内宏之元報道部長の話を伺いました。夕食交流会では、渡波第1仮設住宅自治会長や石巻市立病院開成仮診療所長の長純一医師の話

を聞き、女川町宿泊村協同組合「エルファロ」に宿泊。

30日は、宮城県山元町に津波被災したまま残る中浜小学校を見学。バスの中で、福島原発事故の現状、原発建設の歴史や住民の反対運動のことなど、いわき市の半沢紘さんに話を聞きながら福島県へ。南相馬市に入り、元小高町長の江井績さんがバスに添乗。浪江町からの「立ち入り通行許可証」をバスに掲示し、小高区や浪江町など原発被災地を走る。阿武隈山脈のここは放射線量が高い地域の説明どおり、手持ちの線量計は0.16から0.80



浪江町で福島第1原発のエンツツが見える地点でバスからおいて見る。

に跳ね上がる。人っ子一人いない異質な街並が続く。今は住めない江井さん宅でお弁当を食べ、お茶を頂きながら、気持ちをお聞きする。「忘れないでほしい」の一言が重い。

それぞれの思いを胸に、グッと凝縮した2日間の復興支援でした。

（専務理事 山田栄作）

**女性ネットみやぎ**「学習と交流のつどい～放射能汚染と向き合う私たちの暮らし～」

宮城県内の幅広い女性団体が参加する「子どもたちを放射能汚染から守り、原発から自然エネルギーへの転換をめざす女性ネットワークみやぎ」（略称：女性ネットみやぎ）の「学習と交流のつどい～放射能汚染と向

き合う私たちの暮らし～」が、10月5日（土）仙台弁護士会館4階ホールを会場に、74人の参加で開催されました。

講演は「福島原発事故は終わらない」の演題で、生活協同組合あいコープみやぎ専務理事の多々良哲さんから、新聞報道を時系列に並べることで見えることがあるなどのお話がありました。その後、「丸森・未地の会」の熊谷敬子さんから「丸森に暮らして」と題し、石窯パンを焼いていたがそれができなくなってしまった現状や、自主測定や

損害賠償請求を行なっていることなどの報告がありました。「カエルノワ」の山田泉さんから「子どもたちの日々を守る」と題し、原発事故後に思いを同じくするお母さん3人で結成した会の活動紹介がありました。

原発事故から2年半が過ぎ、放射能汚染水の流出や、新基準のもとでの再稼働の動きなど新たな問題点も浮上してきました。現状について情報を共有し、ネットワーク形成や交流の場づくりを、今後も行なっていくことを確認した会になりました。



左から、山田泉さん、熊谷敬子さん、多々良哲さん

（みやぎ生協生活文化部・女性ネットみやぎ事務局 昆野加代子）